

絵馬から広がる 村人の生活イメージ



絵馬の説明

この絵馬は、大阪富田林市の神社に伝わる、朝鮮通信使を描いた絵馬です。

大阪府の南東に位置する富田林市、羽曳野丘陵の東斜面中腹に「美具久留御魂神社（みぐるみたまじんじゃ）」があります。この神社は『延喜式』に河内国石川郡九座として列挙された1つで、別名和爾（わに）神社といい、千早赤阪村の建水分（たけみくまり）神社を上水分神社と称するのに対して、下水分神社とも呼ばれてきました。

同神社は朝廷との関係が古くからあり、神位や田地がしばしば寄進され、現在では周囲の人々から土地の守り神として崇められています。かつて拝殿の天井には奉納された多数の絵馬が掲げられていました。1980年代にそれらの絵馬の中から、6隻の船と朝鮮の服装を着た人々を描いたものが発見され、大きな話題となりました。

富田林市／文化財デジタルアーカイブ

<https://adeac.jp/tondabayashi-city/viewer/mp000650-200010/065/>

（とても高精細の画像を見ることができます。スライダで白黒にすると、文字が読みやすくなります。）

まずは観察

書かれている文字を読もう
なぜ作られたのか？
どこで作られたのか？
いつ作られたのか？
誰が作らせたのか？

描かれているものを読もう
船の様子は？
旗は？
推力は？
どこを航行？
人の様子は？
それぞれの服装は？
顔の様子は？
所作は？



富田林市／文化財デジタルアーカイブ

<https://adeac.jp/tondabayashi-city/viewer/mp000650-200010/065/>

(とても高精細の画像を見ることができます。スライダで白黒にすると、文字が読みやすくなります。)

どんな人々が描かれている？

上の3隻には、「正」「副」「従」と書かれています。これは、朝鮮通信使の正使、副使、従事官がこの船に乗っていることを示しています。

どの人物がこれらの人々にあたるか、顔の髭や持ち物から探してみよう。



→他の人々や下の船の人々とも比べてみよう。

なぜ作られた？

右から読みます

「奉掛御寶前」と読めます

(寶は宝の正字です)。

最初の「奉掛」は「かけたてまつる」ですから、下からの目線で掛けさせていただいた、という感じですね。

「宝前」は辞書で調べてみましょう。3枚目のスライドの説明がヒントです。

絵馬は、通常は、馬だったり、歴史上の偉人を題材にすることが多いので、通信使を書くことはとても珍しいことです。



→どんな目的で作られたのでしょうか？

いつ作られた？

「乙亥 元禄八年九月吉日」と読めます。

乙亥はきのといで、十干十二支の一つです。

元禄八年は1695年で、五代将軍綱吉の時代、松尾芭蕉が亡くなった翌年、生類憐み政策で中野に犬小屋（野犬を收容する施設）が作られた年です。

実際に朝鮮通信使が来たのは天和2年（1682年）ですから、13年前の出来事を思い出しながら書かれた、ということになりますね。



朝鮮通信使

朝鮮国王が徳川将軍に派遣した外交使節で、派遣目的と人数は以下の通り。

1607年	国交回復	504人	1682年	綱吉就任祝賀	473人
1617年	日本統一祝賀	428人	1711年	家宣就任祝賀	500人
1624年	家光就任祝賀	460人	1719年	吉宗就任祝賀	475人
1636年	天下太平祝賀	478人	1748年	家重就任祝賀	477人
1643年	家綱誕生祝賀	477人	1764年	家治就任祝賀	477人
1655年	家綱就任祝賀	485人	1811年	家斉就任祝賀	328人

→この絵馬が描いたのは、綱吉が将軍になったお祝いに派遣された使節でした。江戸時代の人的一生に一度、見る事ができるかどうかの大行列です。

誰がつくらせた？

「平蔵、次郎兵衛、忠兵衛、太郎兵衛、四郎右衛門、五兵衛、弥兵衛、市蔵、菊松、小右衛門」と読めます。

1人のお金持ちが作ったのではなく、複数人がお金を出し合
って作ったことがわかりますね。

名字はありませんね。



→どんな人達がお金を出して作ってもらったのでしょうか？

どこで飾られた？

「喜志櫻井村」と読めます。

喜志村は、現在の富田林市にあった村で、その中に、宮・平・桜井・川面・大深（おおふけ）・木戸山・新家の村々がありました。喜志地域の桜井村という感じですね。



東シナ海

北太平洋

喜志桜井村はどこ？

右の地図を見て下さい。
大阪との位置関係はここになります。
下のQRコードからも読めます。
ここから、朝鮮通信使の行列を見物しにいったということになります。



東シナ

屋久島

100 km

地理院地図

船を観察しよう

どうやって進んでいるか？

人が漕いで進んでいますね。
帆はありません。

→海を進んでいるか、川を進
んでいるか考えてみましょう。



海を櫓だけで渡るのはむずかしいですね。通信使の海船には帆が装着されて
いました。通信使が載った川船は、実際は下のURLのような船だったよう
です。絵馬の船はデフォルメされていて、13年前の出来事を村人がどんな風
に思いだしたのか、興味深いですね。

<https://adeac.jp/miyako-hf-mus/catalog/mp306280-200030>

(みやこ町歴史民俗博物館／WEB博物館「みやこ町遺産」)

どこで見たのか

朝鮮通信使は、淀川の河口に到着すると、海船から大名が用意した川船（御座船）に乗り換え、淀川を遡上し、淀までこの船にのりました。

帰りも淀から御座船に乗り、大阪まで下ってきています。

ということは、桜井村の人達は、淀川を航行する船を見物したということでしょう。

果たして、村人が見物したのは登りでしょうか？下りでしょうか？



登りか下りか？ヒント①

朝鮮通信使の日記（淀川を上る時）1682年8月2日

大坂城から出て引く船の人夫が三千名もあって、旗標が隊をなして、兩岸を挟んで地勢に従って引っ張っていった。その掛け声は山と海を揺るがして、壮観と言うべきである。（金指南（若松實訳）「東槎日録」）

朝鮮通信使の日記（淀川を下る時）1682年10月1日

午後に一斉に角笛を吹き、一時に船を出発させると、再び櫓を漕ぐ歌が聞こえたが、歌声も更に新たに、帰心を一層促してくれる。私は李錫予と共に、国書を積んだ船に乗った。欄干に寄って談笑しながら、左右を見回すのも、また男子として一度は見ておくべきほどの優れた景色と言うべきである。暗くなってから枚方に到着し、島主（対馬藩主）と相談してそのまま前進して、翌日大阪城に到着した。

（金指南（若松實訳）「東槎日録」）

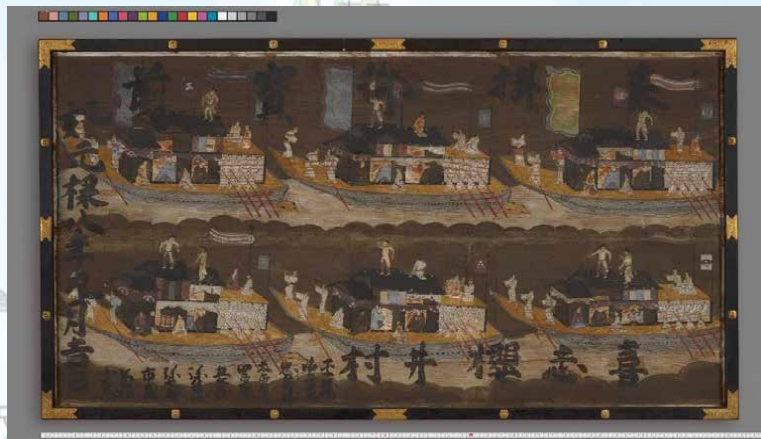
登りか下りか？ヒント②

右の地図を思い出して下さい。桜井村から淀川を航行する船を見に行った場合、船の進む向きはどうなるでしょうか？



正解①

下りですね。櫓を漕いでいる人のみ
が描かれ、綱を引っ張っている人は描
かれていませんし、桜井村の人々が淀
川を見物に行ったら、おそらく南側か
ら見ることになりますから、右から左
に船が進んでいるということは、東か
ら西、つまり淀川を下っているとい
うことになるでしょう。



正解②

実は、もう少し厳密に確定させる要素があります。

下りの日記には国書（将軍から朝鮮国王への）を積んだ船があると書かれています。それが左下の船なのです。

よくみると、国書を入れるケースのようなものがみえます。ここに国書が入り、先ほどの記録の記者が、その横に描かれているのかもしれない。



下りだと考えれば、描かれている人達の表情がどこか穏やかなのも納得できますかね？10月1日ならば高槻のあたりで夕方に、2日ならば大阪で早朝に通信使を見たのでしょうか。

通信使見学は人々の楽しみ

桜井村の史料ではありませんが、美濃国大滝村の庄屋為右衛門が、1748年の朝鮮通信使を見物した様子を記した史料が残されています。

一、朝鮮人御通り、此見物に垂井宿安兵衛ところにて座敷借り、此代錢壹一壹につき一二〇文ずつ、壹三壹分借り申し候、此人数、為右衛門、女房、せがれ幸之助（十一歳）、せがれ左二之助（七歳）、せがれ喜和五郎（四歳）、むすめおりん（十三歳）、おしも、下男源四郎、下女□な、下女やな、此中飯、鳥の子（卵）煮染めに牛蒡・凍りこんにゃく・筍・わらび・梅干し...（朝鮮人来朝二付諸事覚書）

召し使っている人々も含めて家族総出で10名、3畳の広さにごちそうを広げて見物していたのですね。桜井村の人達もきっとこんな様子で見物をしたのでしょうか。朝鮮通信使の一行を見物することは、まさに一世一代の一大イベントだったということです。

地域の絵馬からみえる村の歴史

1枚の絵馬から、いろいろなことがみえてきますね。これはほんの一例です。是非、様々な角度から絵馬を眺めてください。そして、身近な資料にも目を向けてください。

参考文献

- ・黒田日出男・ロナルド・トビ『朝日百科歴史を読みなおす17 行列と見世物』（朝日新聞社、1994年）
- ・金指南（若松實記）『東槎日録 江戸時代第七次（天和二）朝鮮通信使の記録』（日朝協会愛知県連合会、1990年）
- ・洪禹載（若松實記）『東槎日録 江戸時代第七次（天和二）朝鮮通信使の記録』（日朝協会愛知県連合会、1989年）

（慶應義塾高等学校 高橋傑 作成）